

2020. 8. 23 第四主日礼拝

I コリント 5:1-13 「古いパン種を除く」

聖書

- 1 現に聞くとところによれば、あなたがたの間には淫らな行いがあり、しかもそれは、異邦人の間にもないほどの淫らな行いで、父の妻を妻にしている者がいるとのことです。
- 2 それなのに、あなたがたは思い上がっています。むしろ、悲しんで、そのような行いをしている者を、自分たちの中から取り除くべきではなかったのですか。
- 3 私は、からだは離れていても霊においてはそこにいて、実際にそこにいる者のように、そのような行いをした者をすでにさばきました。
- 4 すなわち、あなたがたと、私の霊が、私たちの主イエスの名によって、しかも私たちの主イエスの御力とともに集まり、
- 5 そのような者を、その肉が滅ぼされるようにサタンに引き渡したのです。それによって彼の霊が主の日に救われるためです。
- 6 あなたがたが誇っているのは、良くないことです。わずかなパン種が、こねた粉全体をふくらませることを、あなたがたは知らないのですか。
- 7 新しいこねた粉のままでいられるように、古いパン種をすっかり取り除きなさい。あなたがたは種なしパンなのですから。私たちの過越の子羊キリストは、すでに屠られたのです。
- 8 ですから、古いパン種を用いたり、悪意と邪悪のパン種を用いたりしないで、誠実と真実の種なしパンで祭りをしようではありませんか。
- 9 私は前の手紙で、淫らな行いをする者たちと付き合わないようにと書きました。
- 10 それは、この世の淫らな者、貪欲な者、奪い取る者、偶像を拜む者と、いっさい付き合わないようという意味ではありません。そうだとしたら、この世から出て行かなければならないでしょう。
- 11 私が今書いたのは、兄弟と呼ばれる者で、淫らな者、貪欲な者、偶像を拜

む者、人をそしる者、酒におぼれる者、奪い取る者がいたなら、そのような者とは付き合っはいけない、一緒に食事をしてはいけない、ということです。

12 外部の人たちをさばくことは、私がすべきことでしょうか。あなたがたがさばくべき者は、内部の人たちではありませんか。

13 外部の人たちは神がおさばきになります。「あなたがたの中からその悪い者を除き去りなさい。」

はじめに

コリント教会において教会内の分裂分派の次に扱わなければならなかった問題が性的な不道德の問題でした。コリントの町は商業都市として栄えた一方で、道徳的腐敗の町として有名であることは以前お話ししました。その道徳的腐敗の一つが性的な乱れだったのです。パウロは5～6章にかけてこの問題を扱っており、5章はこうした問題を起こす者への対処について書かれています。

1. 不品行の事実

パウロは教会内に不品行があるという情報を得ました。「現に聞くとおころによれば、あなたがたの間には淫らな行いがあり、しかもそれは、異邦人の間にもないほどの淫らな行いで、父の妻を妻にしている者がいるとのことです。」(1節)と、驚くような事実を聞かされました。ここでいう「父の妻」とは実母のことではなく、父の後妻つまり義母あるいは継母を表しており、それを自分の妻にしているということです。それはレビ記 18:8 や申命記 22:30 などで禁止しているのですが、性的にルーズだったギリシャ世界でさえも禁じられていた罪でした。因みに不品行と訳されていることばは、[ギ] ポルネイアですが、これはポルネー（遊女）から派生したことばで売春を表し、日本語のポルノの語源です。後に「合法でない性交渉一般」を指すようになりました。

この事実が教会内にあることに驚きを感じるかもしれません。先に扱った分裂分派もそうですが、教会は聖なる場所ですから問題など起こらないと思っている方がいましたら、そうではないのです。確かに、信仰者は罪赦された者ですが、それまでに受けた影響や価値観がイエスさまを信じたからと言って瞬間に変わるわけではありません。聖霊の助けを得ながら聖書と向き合い、過去の自分を変えて行かなければならないのです。そのような営みが疎かにされているなら、イエスさまを信じたとしても信じる前と後で生き方が変わることはないでしょう。コリント教会が抱えていた事実はあってはならないことですが、問題があるからと言って、こんな教会はダメだと切り捨ててはいけません。

実は、パウロは不品行と同時に大きな問題だと感じたことがありました。それは、教会内に不品行があることを悲しんだり恥じたりすることなく、まるで信仰者の自由であるかのごとく思い上がっていることでした(2節)。しかも、そうした不品行を行っている信者を「取り除く」ことをしなかったのです。これに対してパウロは、毅然とした態度で否は否と糾弾しているのです。パウロの厳しさは現代でも教会戒規の執行という形で受け継がれており、教会を真に愛する者ゆえの厳しさです。

2. 不品行へのさばき

パウロは3~5節で、そのような不品行の者をすでにさばきましたと述べています。これはどういうことでしょうか。パウロはコリントにはいませんが、「霊においてはそこにて、実際にそこにいる者のように」(3節)語り、「主イエスの名によって」審判を下したと語っています。具体的には、不品行を行っている者を「サタンに引き渡した」のです。これは、永遠の滅びに定めたとということではなく、「彼の霊が主の日に救われるため」に限定的にサタンの支配に委ねたと理解できます。それが教会戒規の執行のような形で表されることはあるでしょう。

サタンに引き渡すということばかり来る印象が強く残りますが、目的は救済にあります。あなたの行いは間違っていると指摘を受けたとき、すぐに悔い改めることができればそれが一番良いのですが、仮にそうでなかったとしても、「主の日」（キリストの再臨）までに悔い改めて救われるために厳しく接しなければならなかったのです。決して懲罰的な意味や見せしめではなく、厳しいですが愛による行動だったのです。

3. パン種を除く

教会内の不品行とさばきから、教会が聖なるものとされるために大切なことが見えてきます。パウロは過越しの祭りのときに使う「種なしパン」を例に、教会は純粋でなければならないと説きます。過越しの祭りでは小羊をほふった後、種（イースト菌）を入れないパンを食べました。それと同様にキリストは罪を贖う小羊としてほふられ、それによってパン種を入れないきよい信者（教会）が生まれたのです。ですから、本来信者や教会は腐敗を招くパン種が除かれた聖なるものとして存在しているのです。

本来持っている教会の純粋さを汚すものがあるならそれは取り除かなければなりません。パウロは腐敗を招くパン種を「古いパン種」と言い、それを取り除きなさいと明言します。イースト菌が発酵してパンを膨らませるように、「古いパン種」＝「悪意と邪悪のパン種」（8 節）を放置しておけば、その影響は教会全体に及び、むしばんでいくのです。古いパン種は取り除き、代わりに「誠実と真実のパン種」（8 節）を用いようではないかと勧めます。混じりけのない純粋なパン種を用い、信仰者も教会も神さまの前に正直に恐れなく歩みたいと思います。ある解説に純粋さを表すことば（[ギ] エイリクリネース）の語源は「太陽の審判を受けた」という意味があると書かれていました。完成した土器を太陽の光に照らしてひび割れがないかチェックした物という意味です。教会が神さまの光に照らされて善しとされていることを喜び、その喜びをもって教会生活を送りたいものです。古いパン種は除かれて、誠実と真実のパン種が教会に増え広がることで、聖なるきよい教会へと

成長し、そこに人々が集まり喜び楽しむ姿をイメージできたら幸いです。そのような教会へと成長させていただきたく願います。

4. 具体的な提言

聖なるきよい教会へと成長するための具体的な提言がパウロによってなされています。「私は前の手紙で、淫らな行いをする者たちと付き合わないようにと書きました。」(9 節)とあります。「前の手紙」とは失われた手紙とも言われており、現存しないのですがこの第一コリントの手紙の前に書いたものです。そこでの内容について、教会外の付き合いと教会内の付き合いの二つの方向から扱っています。

教会外で「この世の淫らな者、貪欲な者、奪い取る者、偶像を拝む者」と付き合いはいけないと言ったら、それが日常の中にあってはこの世の中から出て行かなければならなくなってしまう。そのような人たちの審判については神さまに委ねることにして、問題は教会内の問題であることを明確にしています。「私が今書いたのは、兄弟と呼ばれる者で、淫らな者、貪欲な者、偶像を拝む者、人をそしめる者、酒におぼれる者、奪い取る者がいたなら、そのような者とは付き合いはいけない、一緒に食事をしてはいけない、ということです。」(11 節)。この背後には、「前の手紙」でも指摘したように、罪を悔い改めることをせずそれを放置し続けているなら、そのような者との関わりを絶たなければならないということです。そのための手順を守ることや目的は教会の純粋さを保つためであることを確認しながら、どうしても聞き入れないならば、教会の証のために「付き合いはいけない」という選択肢が生じてくることを覚えなければなりません。排除するためではなく、そうすることによって真の悔い改めに導かれ、救われるためにです。それは厳しく見えますが、罪に対する態度を曖昧にすることの方がもっと恐ろしい結果を招いてしまいます。

信仰者はイエスさまによって罪を示され、十字架の贖いによって赦された

者です。その赦しを軽く見ることは、罪を軽く見ることでもあります。「罪を犯したらごめんなさいをすればいいんだね」と軽い気持ちで赦しを捉え、罪から離れることをしないでいることはないでしょうか。罪の刑罰としてのいのちまで捨ててくださったイエスさまの死を軽んじてはいけません。イエスさまは私たちのためにいのちまで捨てて愛し、罪から救ってくださいました。そのことを忘れないで、一信仰者としても教会としても神さまの前に聖なる者とされて整えられて行きたいと願います。

まとめ

教会内の不品行の問題を通して、古いパン種が残っていないだろうかと問われました。教会はお互いにさばき合う場所ではありません。神さまの似姿に近づくために建て上げ合う場所です。そのために妨げとなるもの、すなわち神さまに喜ばれない罪があるなら、それは取り除かなければならないのです。それを曖昧にすることは結局イエスさまの十字架をないがしろにすることであり、教会がきよさを保って成長していくことを阻むものとなってしまいます。教会が真の憩いの場となるために、神の愛と神のきよさがいつも保たれているように祈りましょう。聖なる教会へと日に日に引き上げていただきましょう。